(II)の冒頭に、天保十四年十二月適塾の過書町移転説の根拠になっていた史料について――弘化二年十二月過書町移転説の確定に関連して――」と題して大略、次のように記載してある。

〝最近、杉立義一氏が「新史料より見たる適塾の過書町への移転及びその名儀の移動について」と題して、従来説かれてきた天保十四年（一八四三）十二月説を完全に否定して、新たに弘化二年（一八四五）十二月説を唱えられた（『適塾』第一九号、昭和六十一年）。そして井上孝治、芝哲夫両氏も「西山靜斎書状について―適塾移転の年は改めらるべきこと―」（同前所収）を発表されて、上記杉立説を別の史料から立証されたのである。これ以来適塾参観者のためのパンフレットにも、このように移転の年月が訂正されるに至った。〟

これは筆者が新たに入手した史料（「永代売渡申家屋敷之事」、「弘化二年己十二月過書町転居諸入用扣」、「家質利銀請取通」など一〇点）により、適塾の瓦町から過書町への移転は弘化二年十二月十五日であることを、本誌（三二巻三号―昭和六十一）ならびに『適塾』誌上に発表した。また井上氏、芝氏の別史料による立証もあって移転年月が訂正確認された。それでは従来、天保十四年説は何を根拠として唱えられていたものか。この点を著者は改めて検討された。それによれば、洪庵の父惟因から洪庵にあてた年号の記入のない十二月十日付の手紙を、緒方銓次郎先生が天保十四年と誤認されたため、『緒方洪庵伝』にもそのままひきつがれたものと判明した。

さらに著者は緒方富雄先生が『科学思潮』に連載（昭和十八年）された「蘭学者の生活素描」の手紙類についても再検討を行っておられるが、これらの作業はなかなか根気のいる研究であり、また著者ならでは出来得ない事と敬服する。

最後にわれわれの大先達である緒方富雄・中野操・藤野恒三郎の三先生の洪庵・適塾研究の逸話などについても述べておられることは、三先生追慕の念を呼びおこさずにはおかない。中野操先生はかつて著者に対し、適塾のことはどんなにおやりになっても、やりすぎることはありませんと申されたという。洪庵・適塾の歴史的評価を考えるとき、改めて本書をひろく推薦するものである。

（杉立　義一）

〔思文閣出版・京都市左京区田中関田町二―七、電話〇七五―七五一―一七八一、平成五年三月十日発行、A5判、五二一頁、定価一二、三六〇円（本体一二、〇〇〇円）〕

星　和夫著『楽しい医学用語ものがたり』

医学用語の語源を扱ったユニークな本が出た。一つの主題を見開き二頁の読み物風に仕立てたもので、おそらく類書があるまい。

この本の著者は外科、臨床検査関係のキャリアの長い方で、現在は青梅市立総合病院の院長をしておられる。序文によれば、著者は学生時代から詮索好きだったとのことで、この辺

が後年本書の出版につながったものらしく、巻末にも数多くの参考文献が列挙されている。

また、序文によれば、著者が編集に関係しておられた雑誌『臨床検査』などに、多年にわたって連載されていたものにこのほど手を入れて、まとめられたものだという。もともと若い臨床検査関係者に話しかける調子で綴られた文章は、今回出版された本書の易しい語り口にも生かされているように思われる。

いま試みに全部で百篇ある本書の最初のほうの題名を順に挙げてみると、ガスとエーテル、クリニック、ホスピタル、ヘマトキシリン、エオジン、頭と脳、リンと電気泳動、ヨウ素、ヘリウム、石炭酸、マンニット、オナニー、ソドミー、男子同性愛、くも膜……、といった風である。

このような主題について語原が述べられるのであるが、著者は連想を利用してつぎつぎに関連の医学用語に触れて行く。この際の連想は医学的な場合、語学的な場合、神話や時事的な場合など、さまざまである。雑誌連載時に読者であった技師の方たちは、ときどき基本的な医学知識を呼び覚まされながら、語原の知識を身につけていったことと想像される。

また、医学用語と言っても性格はいろいろで、上の例にはなかったが、百篇の中には気・膵臓・幽門などという題のものもある。しかし、本書が得意とするのはやはり何と言っても横文字のもので、特にギリシャ神話や聖書に由来するものが多い。また、アラビア語由来のものにも結構注意が注がれている。

本書は本来の読者であった臨床検査の関係者だけでなく、医師・薬剤師その他の医療関係者にとっても、親しみやすい医語語原の参考書として推奨に値するものと思われる。通読するもよし、また邦語索引・欧語索引もあるので、興味のあるところから読むのも良かろう。前にも書いたとおりギリシャ神話には特に広範に意を用いてあるので、そういう方面に関心のある読者や、ギリシャ語が馴染みにくいと感じておられる方にも好適な本と言えよう。

見開き二頁というのは横文字だらけの読み物としては程の良い長さであろうし、かならず入れてあるイラストが適度にアマチュアっぽいのも好感がもてる。前後の見返しが地中海・エーゲ海・ギリシャ地域の地図になっているのも気が利いている。

おしまいに残念なことを一つつけ加えると、かんじんの横文字に綴りの間違いがところどころに残っていることである。初めのほうから例を挙げると、序文の注で女神のAphroditeのpが抜けており、表紙解説では「現代、『衛生学』をhygienという」と述べられているが、ハイジーンという英語風の振り仮名がついているところからすると、これはhygieneであろう。また、十二頁「頭と脳」の中でギリシャ語源の医学用語として「頭痛(cephalagia)」とあって、欧語索引でも同じ綴りになっているが、正しい綴りはcephalalgiaのはずである。

こうした点にいっそうの注意を払っていただければ、われわれ読者としてはさらに安心して、序文や巻末に予告のある本書の続編を待ち望むことができよう。

（三輪　卓爾）

〔医歯薬出版、東京都文京区本駒込一―七―一〇、電話〇三―三九四四―三一三八、一九九三年、A五判、二三九頁、二八〇〇円〕

三浦豊彦著『快適環境のフォークロア』

衛生学は「水と空気」から始まって「水と空気」で終る、と言われるが、本書はその衛生学の真髄についての歴史書である。

医学部における衛生学、その中でも環境衛生学の講義は、学生たちには人気がない。ppmと言っただけで頭の痛くなる学生がいるようである。

そもそも環境基準とか許容量の決定は、人類の健康にとって大変なことであるから、これに関係する当事者たちは、互いに一歩も譲ることがならず、必死のつばぜり合いになる。例えは悪いが、春闘の賃金交渉みたいなものである。これが決まるまでは、いろんな人生絵巻が現出するが、いったん決ってしまうと独り歩きするのは数値だけである。

環境衛生学の講義で学生に示されるのは、この結論であるが、それは人っ子ひとり見当らない砂漠のようなものである。学生たちがこんな講義に好感を持たない気持はよく分かる。

ところが、この無味乾燥な骨標本の上に肉を付け、血が流れるようにしてくれるのが本書である。著者は労働科学の研究に生涯を捧げ、また医史学には極めて造詣の深い三浦豊彦博士である。これ以上の人はいない。

本書の概要を手短かに示そう。そもそも、水と空気の衛生は、既に古代エジプト、古代ローマ時代からの大きな関心事であった。もし、彼らの努力がなかったら、都市形成に手間どり、文明発展の時期は大きく遅れ、今日の世界はなかったかも知れない。

しかしながら、著者によると、この人類の共同目標の前に立ちはだかったのが、鉱業、そして工業であった。人類はここに一つの危機に立たされたわけである。最初の犠牲者は鉱工業の労働者に限られていたが、そのうちに汚染範囲は無制限に拡大し、今日では地球全体が危険に曝されている。

そればかりではない、最近の巨大化した技術は、人間の労働と生活の環境を人為的に変えるようになってきた（アメニティ）。勿論、その意図するところは環境の改善であるが、それは非自然化に連らなる。われわれはこのアイディアの功罪について、さらによく検討しなければならない。

以上が本書において著者の指摘していることの要約であるが、著者はこの主張を展開するに当って、本書全体を人間味あふれる物語り風に叙述しておられる。これが本書の大きな特徴であり、著者の豊富な知識と経験から出る文章は読書の